

報告 I

I はじめに

昭和四九年度の「厚生白書」は、「我が国人口の老令化は急速であり、老令人口は着実に増大し、やがて膨大な数にのぼる」から、「老令化社会への備え」が重要であると指摘しているが、すでに、

農村における老人の現状と問題点

― 農家老人の実態調査結果より ―

井上 和衛（労働科学研究所）

農村では、「高度成長」、農業のスクラップ・アンド・ビルドに伴う労働力流出、いわゆる過疎化がひろがるなかで、老人をめぐる問題が深刻な様相をおびている。

すなわち、資本の強蓄積、農工業間のいちじるしい不均等発展は、第一に、農村における若年労働力を急激に農村から流出させるとともに、農業における基幹労働力である中高年令層、主婦までも、賃労働兼業のかたちで流出させ、第二に、農村地域で都市化・工業化ならびに過疎化をひろげ、農業の基礎的な生産単位としての「家族」を分解変質すると同時に、いわば農業、農村の「解体」をおしすすめてきた。農村におけるこうした事態の展開は、いうまでもなく、農民のいのちとくらしをおびやかすものとなっているのであるが、その矛盾は、農村に滞留する老人の生活のうえにするべくあらわれているといつてよい。

その典型は、過疎地帯における老人のひとり暮らし、あるいは老人世帯の増加などにみられ、それは、老人の過重労働の悩み、生活不安、健康と医療をめぐる悩みといったかたちであらわれている。

そこで、ここでは、最近、われわれが実施した実態調査の結果から、農村における老人の現状と問題点を明らかにしておきたい。

あらかじめ、調査対象を示しておく、調査地は、青森県三戸郡倉石村北向地区（農家数三八戸）、千葉県香取郡多古町方田地区（同四二戸）、広島県庄原市上谷地区（同五八戸）の三カ所である。青森の北向地区と広島の上谷地区は、いわゆる過疎地域であり、千葉の方田地区は、純農村地域であるが、京葉工業地帯の発展、新東京国

際空港の建設とともに、賃労働兼業が広範にひろがっている地域である。なお、北向地区（青森）でも、八戸市における工業化がすすむなかで、通勤兼業がひろがっており、また、上谷地区（広島）では、自動車部品、縫製などのいわゆる農村工場が周辺に進出していることから、主婦の農外就労が多くみられている。

要するに、調査地では、いずれも農民の賃労働化、多就業化がすすんでいる。

Ⅱ 農村における老人世帯

農工業間の不均等発展に伴う農村労働力の流出から、農村の過疎化がすすみ、農村人口の老令化、農村におけるいわゆる核家族化の進行、とりわけ老人世帯の増加が指摘されているので、まず、各調査地における人口の老令化、核家族化の状況を示しておく、つぎのとおりである。

各地区における現住世帯員中六〇才以上の老人の占める比率は、北向地区（青森）が二一%、方田地区（千葉）が二五%、上谷地区（広島）が二四%で、世帯員が六〇才以上の老人だけの農家は、上谷地区が五八戸中五戸、北向地区が三八戸中二戸、方田地区がゼロである。なお、各地区の農家を家族類型で分類してみると、その構成は、左記のとおりである。

	北 向	方 田	上 谷
一世代家族農家	一八%	三一%	五五%
二世代家族農家	六八%	五七%	三六%
三世代家族農家	一一%	一二%	三%

すなわち、北向地区（青森）、方田地区（千葉）、上谷地区（広島）の順に、二世代ならびに三世代の複合家族の農家がすくなくなくなり、過疎化現象がより激しく、かつ農家労働力の賃労働兼業化がより深くすすんでいる上谷地区で、一世代家族の農家が過半数を占めしかも、老人世帯農家が最も多い。

要するに、農村における老人問題は、過疎地域で、より集中的にあらわれているものとみられる。

Ⅲ 農家老人の労働と生活

1. 労働

今日、農業労働力の老令化が指摘されているが、各調査地における農業労働力としての労働年令を検討してみると、おおよそ、つぎのようなものだった。

農業労働力として基幹労働力から補助労働力へ移行する分岐点は男子では六五才、女子では六〇才で、すなわち、六〇才代の後半に入ると、体力低下、疾病率の高まりから、補助労働力に移行するのがふえ、七〇才をこえると、急速に労働能力を喪失するものが増加するようになる。なお、女子については、家事作業の分担などから、補助労働力への移行、農業から離脱する年令が、男子よりも早いことが指摘される。

つぎに、実態調査の結果から、農家老人の従事している農作業を要約しておく、以下のとおりである。

男子で六五才未満の基幹的農業従事者である老人のなかには、老人のみの家庭などで、耕耘機、バインダーなどを自から使用するも

のみみられるが、全体とすると、機械化からとり残されている手作業（除草、追肥、畑仕事など）、ならびに機械作業の補助作業に従事するものが大部分を占め、また、水管理・田見廻りなど管理作業が老人の仕事となっている。なお、自家山林の下刈も老人の仕事となっている。すなわち、主要な機械作業は、若いものが担当しているのが普通で、若いものがない老人世帯ならびに若いものが兼業専従者である農家の場合は、作業委託にだすのが一般的である。要するに、農業の機械化がすすむなかで、老人は、労働過程の一部から排除されているわけであるが、とりわけ基盤整備がおこなわれ、大型機械利用の集团的生産組織（宮農組合）がみられた北向地区では、農作業の受委託をつうじて、老人の農作業からの排除がよりすすんでいた。

その結果、「宮農組合の負担が多すぎる。余剰となった労力で何をやらたらよいかわからない。家計が苦しくなった」といったことから、六〇才以上の老人で、人夫・日雇いでている老人がすくなくならずみられ、農業破壊がよりすすんでいる広島の上谷地区では、中国縦貫自動車道の工事に、七〇才以上で土方にでている老人もみられた。また、七〇才をこえる老人から、「昔は、わら仕事があったが、最近はすることがない。すわってやれる適当な仕事があればと思う」といった声も聞かれた。

要するに、今日の農家老人は、多少の無理があっても、身体がつづく限り、労働から離れられないのが実態であると同時に、適度な労力が確保されることを望んでいる。したがって、「零細農を追

出す国の政策に期待できない。零細農は石にしがみついても頑張っていく以外にない」（千葉・方田地区）、また、「構造改善は、結局、ダンナ百姓だけが残ることになるから、反対だ」（広島・上谷地区）ということになっている。

2. 生活

農家老人にとって、後継者への経営移譲はいうまでもなく、生活上重要なエポックをなす。ところで、経営移譲とは、農地を中心とする農業資産の所有名義を後継者に移譲することで完了するものであるが、現実の経営移譲過程は、まず、所有名義を移譲するまえに、経営責任（経営権）ならびに家計管理責任だけを後継者にゆずる、いわゆる財布ゆずり又はダンナゆずりがおこなわれるのが普通である。

そこで、実態をみると、いわゆるダンナゆずりは、本人が老令化に伴う基幹労働力から補助労働力に移行する時点、または病気などで農業から離脱する時点でおこなわれているのが一般的である。したがって、老人の自由になる現金は、六〇才代後半になると、「子供達から」、「年金から」とするものの比率が高まる。

ところが、小遣いが「足りない」とする老人が、千葉の多古町では二割程度であるが、青森の倉石村、広島庄原市では三〜四割もみられた。なお、国民年金、老令福祉年金の主な使途をみておくと、全体をつうじて、酒・煙草等し好品の購入にあてられているものもすくなくみられた。

したがって、老令福祉年金の増額を要望するものが多く、とりわ

け戦争で息子を失った老人からは、軍人遺族年金の増額を要する声が強かった。

3. 健康状態

前述のごとく、六〇才以上の農家老人は、六〇才代の後半になると、基幹労働力から補助労働力に移行するものがふえ、七〇才をこえると、農業労働から離脱するもの増加するのであるが、これは健康状態と対応している。

すなわち、各地区の実態からすると、高血圧であるものが六五才をこえると、二〇〜三〇%に達し、六〇才以上で健康良好であるとするものは、北向地区（青森）では三六人中一二人、方田地区（広島）では三五人中一三人でしかなく、要するに、六〇才以上の農家老人のうち六〇〜七〇%がなんらかの病気をもっている。したがって、農家の老人にとって、医療問題はきわめて切実な問題であり、とりわけ、過疎地域では深刻である。たとえば、「二人で病院通いをしているので、通院費がかかりすぎる（交通不便のためハイヤリ用）」といった事態が広範にみられている。

要するに、資本の強蓄積は、農村、農民家族の「解体」をおしすすめる、そのなかで、老人の労働、生活、健康をめぐる諸問題が、貧困化の新しい一形態として累積しているのである。